

保育雑誌より

保育の手帖

今月号は評論家の二つの文章がのっている。串田孫一氏の幼稚園時代と春山行夫氏の春の花々である。

保育室に飾る花、花壇に咲き競う花、子供たちと一しょに世話をする鉢植など、子どもの心を豊かに美しくする花とは切っても切れない生活をしているものにとつては、大変参考になるし楽しく読むことができる。

丸山久子氏の子どもと行事、こどもとけむしの研究文をかかれた、うえだゆうこ氏など、きれいな色彩で新鮮な母のかかれた今月号の表紙とともに季節感覚を十分に盛り込まれた編集がなされている。

年間保育計画の五月細案と解説は連続して具体的に綿密に掲載されている。六領域

に分けて担当しておられるが、具体的な実施場面をとらえて、しかも根本方針を述べられているので、経験者も未経験者も読み易い。それだけに、書かれた方々のご苦労がしのばれるようである。

上沢謙三氏の五大ばなしの扱いがある。戦後、風潮が変わったり、変革があったのであるが、この辺でもう一度よく考えてみる必要があると思う。教師が一応の考え方——それも一方的に偏しては困るが——をもった上で、国民童話は子どもたちに吸収して貰いたいものである。道徳観の問題や筋の改変訂正のこと、現在扱う際の心がまえや態度などくわしくかかれている。

保育の友

この号の主な読みどころは、幼稚園と保育所と二本立てに進んでいる保育の制度を問題にした記事である。幼稚園と保育所を一本にまとめる希望は保育所側に強い。坂

元彦太郎、田頭晴彌、浦辺史の各氏がそれぞれの立場で意見を述べているが、結論的にみると、理想としては一本立てていきたいが、現実には無理が多いし、また保育所だけの単独立法も望ましくないということに要約されるであろう。

もつとも一本化の問題も学校教育法を立案していた昭和二十一年ごろにやればできなくはなかったが、現在は、文部省、厚生省と行政の管轄も異なっているし、さらに学校教育関係のことと、社会福祉関係のことという区分が通念上もはっきりあり、根本的な社会革命でもないかぎり、一本化は難しい(坂元)という。

では現実にはどう解決したらよいであろうか。それは幼稚園は就学前の幼児教育の施設として、保育所は乳児、幼児、低学年児童のための「保育に欠ける子」の世話や保護をする昼間養護施設という面で、それぞれの社会的要求にこたえることが肝要である(坂元、浦辺)。しかし、かたくなに

自分の領域のみにふみとどまっているのは望ましくない。なぜなら実際にある幼稚園や保育所の社会的機能なり、性格なりをきめるのは地域社会の教育要求であるからである。ある地域によっては、幼稚園だけというところもあろうし、保育所だけというところもあろう。是非ほしいものは保育経

営の十分な予算の裏づけであるのはいうまでもないが、一本化をめざすより幼稚園の義務制を目標にして、幼稚園と保育所とがその枠をはずして相互に手をつないで、就学前施設の拡充をはかるべきである（浦辺）。保育所は保育にとり残された措置児童に近い境界線の境遇の子をもっと拾いあげるべきである（坂元）。あるいは、保育所を隣保教化事業の一環として考えることが望ましい（田頭）。などの味わうべき三氏の意見がみられる。

「私の実践記録」の欄には前田登美子氏が、子どもとの垣根がとれたのにと題して、自分の悩みを訴えており、これに答え

て心理学者の乾孝氏は、自信をもって進むように、大切なことは、心と心の結びつきであり、そして正しい人間関係であるということと、その実践の上に立って、先輩たちの残してくれた指導法を再整理し、保育を科学化していくべきであると教えている。学ぶところが多かった。

五月の保育計画表と保育計画解説は、月号そうであるけれど、本当に参考になる記事が多く盛られていて、月号届くのが待たれる思いがすく欄である。

幼 児 の 指 導

特集の「幼児画の指導は幼児の生活指導から」が、いろいろな実例をあげ、具体的に指導の実際をのべておられるので、参考になる面も多くすぐに実践に役立つであろう。

前号からの世界の子どもたちは、今月はドイツでの考え方、子どもものしつげに大事

なことは、の一文は、未知の世界のことであるので興味深い。

「教師の心、子ども心」の野間忠雄氏の随想はおもしろいので要約してここに紹介する。

◎菊作りか、大根作りか

人を育てる者の心の持ち方は、菊好きが菊作りをするようなわけにはいかない。菊作りは、花のみごとに咲く菊ばかり育てようとして、枝を折りすてたり、つぼみを摘み捨てたり、望みどおりのよい花がつきそうにないものは抜きすてて、これはと思う菊のほかは育てようとしなない。

それにひきかえて百姓の大根作りは、畑の中には上できもあり、へぼもあり、大株小株いろいろあるが、一本一株それぞれ心をこめて育てる。そしてすべてそれぞれに適した料理をして食卓に供される。漬物になるものもあり、大根おろしになるものもあり、輪切りにされておでん料理にされるものもあり……どれも一様に世のために役

だっている。

人の子の師たるものの心構えは、菊作りよりも大根作りに近いようである……。

なお、五月の指導の手引き視聴覚保育、健康、製作、自然、社会、言語、リズム遊び、保育計画などは、実際にすぐ役立つ資料である。

幼児と保育

「幼児期の栄養」というのが本号の特集である。

まず園児のおべんとうについて、その量、質が園児の身体の発育（体位、運動能力、知能）どのような影響を与えているかを調査し、主食、副食の量、また副食の食品数が多いグループでは、体位、運動能力、知能のいずれの面においても優位の傾向を示していることを認めている。

次に、どういうものが幼児のからだに不足しがちであるか。全体の熱量は足りて

も、その質の点でバランスがとれていない

のではないか。日本人の食生活全体の欠陥のように思われるが、やはり蛋白質、カルシウム、ビタミンA、Bなどが不足しがちであること、おとなと違って成長期の子どもにもは重要な問題であることがのべられている。そして、栄養の問題は、身体だけでなく性格にも影響する可能性があるなど、いろいろな面から栄養の問題をとりあげている。栄養の問題に続いて保育所などとりあげられる給食の問題についても、宮崎県の保育所からの実践報告がのせられているし、また家庭でのおやつの問題にもふれている。

こういう栄養の問題は、幼稚園や保育所だけでは解決のつかない問題なので、ぜひ母親とともに一読したいものである。

保育ノート

「社会性のない子ども」■特集■

幼児教育の主目標である「社会性を養

う」ということについての特集号。入園して一ヶ月たち、そろそろ自分の姿をあらわしてきはじめたこの頃、いろいろのケースにぶつかっている教師たちが、第一ページの「その保育について」（牛島氏）、第二ページの「その意義について」（周郷氏）をよむことは、幼児の社会性について考えたり、また自分のもっている考をもう一度ふりかえてみるのによい機会である。

一ページでは、「とかく社会性のある子をよい子と考えるとここに問題がある」とし、「幼稚園にはいってこる子どもたちは社会性のないのがあたりまえで、入園当初から正しい社会的適応がとれるような子どもは幼稚園に入園する必要のない子どもである……。」といっておられる。

そこで保育にたずさわる人がとかくおちいり易いことについて再び考えてみなければならぬと思う。それは、せっかちに今したことの効果をすぐに期待し、手の

かからない子をよし、とすることである。学校教育法の「芽生えを養う……」ということをもう一度静かにかみしめ、味わってみる必要のあることを感じる。またその反対に社会性のない子について、家庭環境に問題があると考え、それについて何の努力もしないで、そのうちにと解決を時間に求める考が非常に多いが、適応のためには、人間関係の成功の経験が大切であるから、日頃の観察からその個人に適した指導が工夫されなければならない、とも述べている。

二ページの問題も、われわれが簡単に「社会性」といつてしまうことが、勝手につくってもらっている社会性というものさしについての一考を促すのによい記事である。

保 育

『保育』の五月号は、目録だけではあまり

とびつくものはない。母親には参考になる点も多いだろうが、教師にはあまり耳新しいことはない。むしろ今までよく聞く問題が多い。こんな気持ちで読みはじめてみたが、まず第一ページから重要な根本問題にふれていたのを目を輝かせた。ここに紹介しよう。

『年少児保育の理論と実際(二)』姫路大学の守屋光雄氏の講。

前月に続いたものだが、年少児保育の実践についてどの点に留意してやったらよいかとの問題が考えられている。

- 一、教員の研修の必要。
 - 二、両親教育が必要。
 - 三、生活指導が重要な位置を示める。
 - 四、言語指導。
 - 五、観察の指導。
 - 六、健康の指導。
 - 七、絵画製作の指導。
- 以上、実際例も表示され、よく指導の根本問題を指摘してある。

『年少幼児の生活は、仕事と遊びが全く未分化で、活動そのものが自己目的的、つまり遊戯的である。活動がある目的に向ってなされるのでなく、遊び自身が過程性をもっているのである。(中略)そこではとくに自由保育が尊重されねばならぬ。(中略)子どもをワクに入れて指導する事は極力さげ、自発活動つまり自由遊びを主体にした保育が行われるべきである。(後略)』(本文抜粋)

幼児を幼児として保育する重要な根本の考をしつかりと表示してあり、私どもの毎日に力をえられる。他の経験の指導も、同感のそして適切である御意見が記され、理論家である氏に敬意を表し、また種と呼ばれ、行われている保育方向をしつかりと正しい、適切な道に向けていただけたことを喜び、多く読まれることかおすすめる。

月刊保育カリキュラム

まず扉をあけると坂本彦太郎氏の「望ましい教師の姿」が眼にはいる。

おさなこの師は 才たけて

みめうるわしく なさげあり

たったこれだけのことばの中に、実に深い、おさなこの師としての望ましい姿が写し出されている。よくよく味って読み、わが身にふりかえって「日頃の我」を反省してみたいものである。

「五月のこどもの姿」は山村きよ氏が書いておられるが、とかく日々に追われがちな保育者たちにもう一度今の子どもたちの実際の姿を見直す心の余裕をあたえてくれる。見直してこそ次への理想的の保育が生れるはずである。

次に六領域の中から二、三を拾ってみると、言語では「おしゃべり、出ししゃばり、だんまり、はにかみ」「あいさつのことば、実のあることば、やくにたつことば」と、五月のこの頃のとりどりの花ともいえる子どもたちの指導を気持よくかかれています。

音楽リズムでは強くこと、打つことの楽器あそびに、いろいろの工夫がなされ、高価な楽器を買わずとも、空びん、竹、貝、石ころ、びんの口金などでつくられた興味あるものが紹介されている。絵画製作では、この頃の、かきたい欲求、つくりたい欲求の満足をみたすため、フィンガーペインティング、粘土を第一にとりあげ、その在り方がかかれています。

両親教育では、とくに親子ともにつかれてきたこの頃、話し合の大切なこと、いろいろの方法で教師と母と一緒にする機会を多くすることを教えている。

三才の保育としては前号にも紹介したが、三才としての特徴、保育技術、理想環境、母親の指導がこまごまとかかれています。三才を受持ったれる保育者に参考にしてほしいところである。

* * *

幼児の教育 第五十六巻 第八号

◎ 定価 五十円

昭和三十二年七月二十五日印刷

昭和三十二年八月 一 日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購入についてのご注文は発売所
フレーベル館にお願いたします。